

浮世絵と描かれた江東①

浮世絵のはじまり

江東区深川江戸資料館

浮世絵は、江戸時代に発展した絵画で、日本のみならず海外においても知られている、日本を代表する絵画のひとつです。そこには、「浮世」、いわゆる当世風俗が描かれ、人気の歌舞伎役者や相撲力士、巷で評判の芸者や町娘、行ってみたい名所などが数多く題材になっています。

資料館ノートでは本号から6回にわたり、浮世絵とそこに描かれた江東区の名所や文化などについて紹介します。今回は、浮世絵のはじまりについて取り上げます。

1. 庶民の間で親しまれていた浮世絵

江戸時代の浮世絵（錦絵）について、天保5年（1834）に刊行された『江戸名所図会』に次のように描かれています。

「錦絵 江戸の名産にして他邦に比類なし。中にも極彩色殊更高貴の御翫もてあそびにもなりて、諸国に賞美する事、尤もつともおびただ夥し。」

これは、錦絵（多色摺りの浮世絵）が江戸庶民だけでなく、その愛好が高貴な層にまで及び、江戸以外の地域においても人気があったことが記されています。また、浮世絵は大量に、安価に人々の手に渡ったことにより、様々な情報を発信するという意味で現代のメディアのような役割を果たしていたといえます。また、その特性から江戸を訪れた人々が故郷へ帰る際の土産物としても用いられ、「江戸絵」とも呼ばれていました。

2. 「うきよ」絵

浮世絵とは、「浮世」を描いた絵のことをいいます。この「うきよ」とは、当世のことで、いわゆる「この世」のことですが、古代から中世にかけては仏教的な厭世思想を受けて「憂世」と表記されてきました。中世の頃は戦乱が多く、この世は思うことの叶うことがない辛気なものという意味です。そして、近世になると、戦乱がなくなり日々の暮らしが浮き浮きと楽しく暮らすことのできる「浮世」として肯定的に捉えられるよ



斎藤長秋（著）長谷川雪旦（画）『江戸名所図会』巻之1
天保5年（1834） 当館蔵

うになりました。すなわち、「浮世」とは、当世の風俗を題材に描かれた絵画のことをいい、大別して、一点物の絵画（肉筆絵）と大量生産する木版画に分類することができます。「浮世絵」という言葉が登場するのは、天和年間（1681～84）頃です。

3. 浮世絵のはじまり

(1) 初期浮世絵

浮世絵の流れは、大別して2つの流れがありました。1つが、肉筆風俗画と呼ばれる、いわゆる「洛中洛外図屏風」などに代表する狩野派を中心とした風俗画です。その一方で、新しい芸能として人気を集めた阿国歌舞伎や遊女歌舞伎などに取材する歌舞伎図屏風などで、美しく魅力的なポーズを見せる艶姿が喜ばれ、やがて画中に1人だけの舞姿をおさめる美人画が描かれた掛軸画が流行します。

もう1つが、江戸時代の印刷技術の発達と出版物の木版挿絵本の流行です。それまでの印刷技術は、筆によって文字や挿絵を写し取る写本が大部分で、庶民が本を身近に楽しむことができませんでした。江戸時代の印刷技術の発達により、筆写に代わるものとして木版印刷による版本が普及していきます。読者は庶民であることから、古典文学よりも親しみやすい大衆的な内容の読み物の「仮名草子」が発達します。

仮名草子は、旅行記や遊里の評判記などが仮名交じりの読みやすい文章で書かれた娯楽的な読み物です。次第に挿絵が描かれ、文字と挿絵により当世の風俗を反映した「浮世草子」となります。井原西鶴が天和2年(1682)に出版した『好色一代男』が人気を博したことにより、さまざまな浮世を反映した版本が出版されます。江戸で出された『好色一代男』の挿絵を描いたのが菱川師宣でした。この肉筆風俗画と木版挿絵本の流行の2つの流れが合わさり、浮世絵が誕生します。

(2) 浮世絵の始祖「菱川師宣」

「見返り美人図」で知られる菱川師宣(?~1694)は、安房国保田村(千葉県安房郡鋸南町)に生まれ、家業は染色関係の技術者である縫箔師といえます。師宣が浮世絵師となる経緯について、『大和武者絵』(天和4年・1684)の序文で触れられており、そこには、師宣が保田から江戸へ出てきて、若い時より絵画に心を寄せ、幕府や朝廷の御用絵師らから画風を学び自らも工夫して様式を確立し、浮世絵師として名を確立したとあります。

当初は版本の挿絵師として活躍し、江戸の風俗を題材とした挿絵を多く手掛けていました。やがて、挿絵部分を独立させ、一枚摺の版画として売り出します。その頃の浮世絵は、輪郭線のみを版で摺り、筆にて彩色を施したものでした。その後、浮世絵は技術の発展により墨で摺られたものから錦絵と呼ばれる多色摺の浮世絵へ発展していきます。

4. 浮世絵には何が描かれたか

浮世絵は「浮世」を描くことから、当世風俗である人々の暮らしや生活している場所が題材になりました。なかでも美人画・役者絵・名所絵(風俗画)が多く描かれています。

美人画は、吉原遊郭の花魁などの遊女や芸者、そして有名な町娘などの美しい女性が描かれます。描かれる女性の服装や髪型、髪飾りや仕草の違いなどにより、対象が描き分けられていました。美人画は時代や絵師により、美人の典型が大きく変化するのが特徴です。「深川の雪」を描いた喜多川歌麿も美人画を描いた絵師のひとりです。

役者絵は、大衆の人気を集める歌舞伎役者が描かれました。多くは芝居の上演に即した姿絵が描かれています。役者絵は、鳥居清倍などの鳥居派や勝川春章などの勝川派の絵師によって描かれており、



東洲斎写楽「三代目大谷鬼次の奴江戸兵衛」
寛政6年(1794) 日本浮世絵博物館蔵

役者の表情や所作、芸や着物の紋など細かいところを表現しているのが特徴です。なかでも、東洲斎写楽は1年足らずの活動期間で多くの代表的な作品を描いている絵師として知られています。

名所絵(風景画)は、江戸の町をはじめ多くの人たちが訪れる名所が描かれています。これは、庶民の旅への関心の高まりや、名所での行楽の盛行などが背景にありました。名所絵はシリーズとして出されるものが多く、葛飾北斎の「富嶽三十六景」や歌川広重の「東海道五拾三次」「名所江戸百景」、歌川国芳の「東都名所」などが広く知られています。描かれる対象は、山や橋、川などの人が多く訪れる繁華な場所や行楽地、そして有名な神社や寺などが取り上げられました。

他にも、武者絵や物語絵、花鳥画、戯画や相撲絵なども多く描かれています。浮世絵は、描かれる題材の豊富さと、安価に人々の手に渡ったことにより庶民のなかに浸透していったのでしょう。

(松本智恵)

【主な参考文献】

小林忠、大久保純一『浮世絵の観賞基礎知識』(至文堂/1996)

国際浮世絵学会編『浮世絵大事典』(東京堂出版/2008)

小林忠『浮世絵(日本の伝統文化シリーズ2)』(山川出版社/2019)